

勝林寺寺報



ある娘と母親の物語 (1998)

今から一年前、昨年の三月、神戸の一人の中学生が、小学校の四年生の女の子の頭を殴って殺し、またそのあと、小学校の六年生の男の子も殺して、その頭を校門の上に置くという、世間を驚かせた恐ろしい事件があつた少しあとに、この事件で最愛のわが娘を失つた母親の談話がある新聞に載っていたのを読んで、深く心を打たれました。それはこの母親は、いつもこの娘に向かつて「困っている人がいたら、少しでも助けてあげるよう」など教えていたというのです。実はこの犯人の少年は、その時に「手をあらうところを知らないか」といつて、「この女の子に近づき、「近くの学校にありますよ」といつて、親切に案内してくれた、この子のうしろから、隠していたハンマーで頭を殴つたというのです。そこでこの母親が、もしも私がこんなことを教えていなかつたら、こんな恐ろしい事件にはあわなかつたかもしれない。とても悲しいといわれた後、でも、私は決して間違つたことを教えたとは思わないし、この子も正しいことをしたのです。と申しておられました。私はこの談話を読んで、母親の心中を推察するとともに、深い感動をおぼえたことありました。

その母親が、このたび「生きる力をありがと

う」と題した手記を出版されました。私はさつくり読ませていただきました。その本の表紙にいたであろう、可愛らしい片方だけのスニーカーの絵が掲げられていますが、そのそばに、この子が書いた「あるいは走つたりしておつかれさま! ガンバッテくれてありがとう」という文章がそえてありました。私はこの表紙を見て、なんと心の深い絵と文章であろうと感心いたしました。

私はあらためて、この母親の言葉を思い起こし、またこの絵と文章を通して、失われた幼い命をいとおしみつつ、やさしいこの娘の心と母親の生きざまに対して、心から敬服し、尊く思いました。

(信楽峻嶺遺稿法語集より引用)



お礼

* 永代経法要懇志の袋を配布していただきます。
ご協力をお願ひいたします。

講師 淨蓮寺住職 竹内俊之師

日時 七月八日 (金) 午後七時三〇分より
七月九日 (土) 午前一〇時より

日時 七月八日 (金)

二日 (土) おみがき奉仕
三日 (日) 出石組 仏事総会
六日 (水) 兵庫教区 教区会

日時 七月九日 (土) 午後七時三〇分より
午前一〇時より

二日 (土) おみがき奉仕
正福寺 永代経
三日 (日) 出石組 仏事総会

日時 七月九日 (土) 午前一〇時より

八日 (金) 勝林寺 永代経
九日 (土) 勝林寺 永代経
一〇日 (日) 出石組 連研 研修旅行

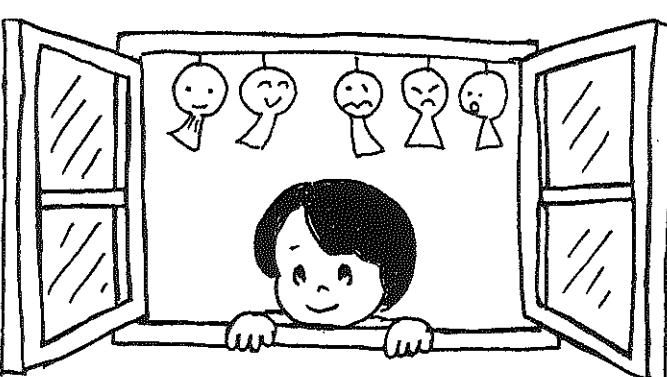
一六日 (土) 出石組 同朋講座
一七日 (日) 平野克彦宅 一周忌

一八日 (月) 数森元博宅 忌明法要
二六日 (火) みのりを聞く会

三〇日 (土) 数森浩昭宅 七回忌
三一日 (日) 宮嶋大樹宅 初盆

永代経法要のこ案内

七月 勝林寺 予定



(敬称略)

も正しいことをしたのです。と申しておられました。私はこの談話を読んで、母親の心中を推察するとともに、深い感動をおぼえたことありました。

その母親が、このたび「生きる力をありがと

葬儀

六月十九日 正法寺 数森 敏子様 九十四歳

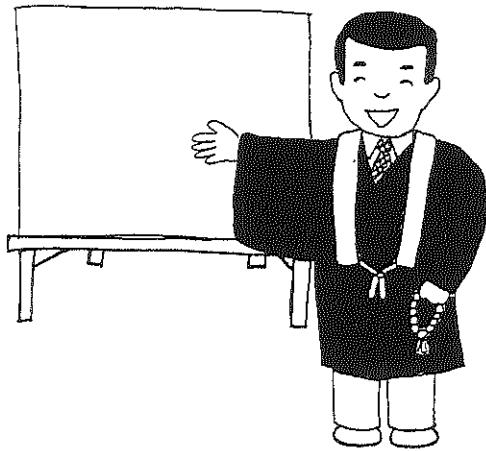
六月二十二日 日高町 宮古智慧子様 八十七歳

蓮如上人の「教化」

室町時代も末期、一四五五年、東山大谷本願寺に父存如の子として蓮如は生まれた。父は、そのとき二十歳であった。母は、父母に仕えていた召使であり、身分の卑しい人であったといふ。この夫婦の間に生まれたこの子を「布袋丸」と名付け、のちに「幸亭」と改めた。母は、幸亭六歳のある夜、ひそかに本願寺を去つていつたといわれている。「幸亭」に鹿の子絞りの小袖を着せて、近くの絵師を呼び寄せて、二幅の肖像画を描かせ、それを一幅ずつ分けて、夜蔭へと消えてゆかれたと言い伝えられている。「」の国にただ一人親鸞様のみ教えを受け継いだあなた、どうか誤りなく、一天四海隔ずみまで言い伝え、広めておくれ。これが母のただ一つの願いです」との言葉を残して、後々、長く人を使つて播州方面を探したが、生涯再び会うことにはなかつたそうだ。「御同行とともに歩め」といわれた母の言葉は、生涯蓮如の心から離れることはなかつた。

七歳の時、次の母「如円」様が、入内なされて、父との間に「男四女をもうけられたが、蓮如上人との交わりはほとんどなかつたといわれる。さて、一七歳の時、得度を決心するが、そう簡単なことではない。当時は、格式門地高い貴族でなければダメであった。そこで探し探して中納言広橋兼郷の養子にしてもらい、名も兼寿と改めたうえで、ようやく得度させてもらえたという。

ついで、蓮如は、今小路通りにあつた「常楽台」（本願寺第一の学匠存覚上人のお寺）で学ばれた。そこには、叔父の空覚もおられた。ここには、たくさん宗学の書籍が数多く所蔵されていた。それらすべてを書きし、学んでいかれた。すべての書籍を誤りなく、正確に写し取ること



によつて、その心を把握していく。当時は、そんな方法が正当な学問方法であった。その間、ずっと心の中に響いていた言葉が「遠く通ずる

四海のうち、皆兄弟なり 同一に念佛して 別の道なればなり」善導様の礼讃の一句。お念仏の兄弟。ここに生きよう。それしか我が道はない。若い蓮如は、決意した。上も下もあるものか。同じ兄弟としてともに語らつていく。仏さまの呼び声の中で。

叔父に南都奈良興福寺大乗院の門跡経覺僧上。法相・天台を中心広く世俗の学問・芸能まで学ばれた。蓮如は、一回りも二回りも飛翔していった。

父の後を継いで、門主になるや、内外すべての段差を取り払つた。膝詰めで、同座で、同行と語つた。「御同行とかしづいて」と言われた親鸞様を見据えて。

当時、世間は運上金・冥加金の時世で、中でも、比叡山は、僧兵をかりだして大暴れしていた。無法無謀な取り立て、それが常体の時代であつた。この無法な比叡の嵐から、蓮如をわが兜のよう守ってくれた当時の琵琶湖商人軍団の棟梁「法住」。この庇護の中で、蓮如の北陸教化の旅は始まる。

（文責 前住職）

法語カレンダー（HPより一部抜粋）

往くも還るも 他力ぞと
たゞ信心をすすめり

私たちがものを食べる「どう」とは、「どうう」とでしょう。私たちが毎日排泄する便。それを食べ物かすだと思っていませんか。実は便を構成している固形物の内容は、体内の細胞の老廃物が半分、残りは腸内フローラと呼ばれる細菌類の死骸がほとんどで、食べるものの残滓は一割もありません。

分子生物学者の福岡伸一氏は「う説明します。「食べものの分子は、単にエネルギー源として燃やされるだけではなく、体のすべての材料となつて、体の中に溶け込んでいき、それと同時に、体を構成していた分子は、外へ出していく」といふ」とです」（『生命と食』岩波書店）つまり、「食べる」ということは極微の田で見ると、食料の中から栄養を取りだすためのものではなくて、自分と食料を一体化させ、交換させる作業だということです。自分が壊されると同時に新たな自分が形成される、そのようなのちのダイナミズムの中に私たちの食はあるのです。

仏教では「諸行無常」と説きます。どんなものも一瞬でも常ではない、とどまつてはいない、といふ」の教えはまた、とどまつてはいた、常でいたいと思う私への厳しいお諭しもあります。確かに私が「」にあつて、「の私を維持するために食事をする。そういう考えたら食べものは単なる燃料、モノです。しかしそうではなく、食べる「どう」とは、その対象の全存在を受け入れる」とあります。いのちの只中にいる私である」との一局面であると知らされたとき、食事の際に「じただきます」と頭をさげていた私が、「じただきます」と頭をさがる私に育てられます。

（文責 松本智量（まつもと ちりょう））

とすん

今日は、「」門徒の皆さんにあまり知られていない勝林寺の「とつておき」を紹介します。第一回目は、「とつておきの池」です。「えつ？ 勝林寺に池なんてあつたつけ？」と思われるるのは、無理もありません。勝林寺

は、表から見ると、一軒のお蕎麦屋さんに挟まれた位置にあるように見えますが、実は、その奥は、複雑に入り組んでいて、向かって左隣の「左京さん」の建物の後ろ半分から裏の川まで

は、勝林寺の一部になつています。そこに今回紹介する手作りの池があります。若院（深音）が、中学校三年生の夏のことでした。当時花だんだつたその場所を「掘つて土を運び出す作業」を汗だくになつて数日繰り返し、掘りあがつた穴に、ブルーシートを引いて周りを煉瓦で押さえ、中に水を張つただけの池を完成させました。

夜店でくつてきた金魚を広い場所で泳がしてやりたいという思いからの彼の行動でした。さて、この池のとつておきが、この制作のエピソードにあるわけではありません。実は、そこに育つ金魚にあります。夜店の金魚ですから、放したての頃は、わずか一、二センチだったのが、水がよかつたのか環境がよかつたのか、どんどん大きくなり、あれから一〇年以上が経ち（途中、野良猫やサギに襲われて一度全滅しました）今では、一五センチを超える巨大金魚になつたのです。いえ、とても金魚には見えません（笑）。私たちが、近づくとすぐにそばに寄ってきて、餌をねだります。ついついやりすぎるので、益々太っちょ金魚になつていきます。また、住職は、金魚の卵を育てることに成功し、その数百匹以上！私たち家族には、見慣れた光景になりましたが、初めて見られた方は、たいてい驚きの声をあげられます（笑）。ぜひ、次に勝林寺にお参りの折には、「金魚を見て」と気軽に声をかけてください。

（文責 坊守）